

詩を書く(う)保護者・初等部児童・中等部生徒の皆さんへ① ニュージャーシー補習授業校 (十二月二十二日)

詩は、普段お話をしている日本語で「お母さん」や「お父さん」にお話するように書けばいいのです。

ひとつの場面を切り取って(十五秒のテレビコマーシャルのように)、伝えたいことだけを書くのです。「見たまま」「聞こえたまま」「したことを順番に」書くのです。これは作文と同じです。また、俳句や短歌と同じ視点で書くことが理解できます。具体例は、財団の文芸作品コンクールの優秀作です。参考にしてください。

【視点1】できるだけ形容詞は使いません。イメージをせよ。様子や行動を書きましょう。(作文・俳句・詩も同じ)

赤い風せん

ロサンゼルス補習校 小三 河崎碧

わたしが、赤い風せんをお店でもらった。

弟にあげたら、弟が風せんをもつてお店の中を

歩き回った。

いつもお店に行くと走り回って大声を出している

弟がにこにこしている。

買いたものが終わった車にのる。

車にのる時に、弟が風せんから手をはなした。

風せんが車のやねの上上がった。

お母さんがジャンプした。

風せんは、どンドン小さな赤い点になっていった。

【視点2】比喩(たとえ)を使いましょう。読む人に作者の気持ちが伝わります。(作文・俳句・短歌も同じ)

氷につつまれたえだ

シカゴ日本人学校 小三 土岐菜里奈

きれいな氷につつまれた木に出会った

今年の冬

冬は氷にまもってもらっているの

氷はとってもとっても温かいの

毎年 毎年

氷はわたしをまもりに来てくれているの

わたしはそれが

とってもうれしい

きれいな氷につつまれた木に出会った

つるつるしていて

とっても つめたくて

ダイヤモンドみたいに光っている

さむそうにしているそのえだに

そっと話しかけてみた

その木はこたえた

シカゴの冬はさむいけれど

わたしの庭の木と氷

わたしの庭の

すてきなかざりに

なってくれている

(続く)